碑」に書いてあること　神緑会ニュースレター　第6巻3号 p. 27–32（2014）
2）長澤亘　八十八歳夢物語　昭和29年　長和会刊（私家本）
3）寺島俊雄著 故神田知二郎先生の墓の発見　神緑会ニュースレター　第6巻2号 p. 20–23（2014）
4）高階経和　ヒストリア --- 華岡青洲の高弟 高階経宣と初の女医を育てた高階経徳（1）大北医報 No. 247 p. 23–25（2015）
5）池田文書研究会　池田文書研究（二十）　高階経本の書簡について　日本医史学雑誌　第45巻3号 p. 421–433（1999）

（平成30年3月例会）

書　評

スーザン・P・マターン 著，澤井　直 訳
『ガレノス：西洋医学を支配したローマ帝国の医師』

医学史の通史を大学生向けに教えるとき，ガレノスやガレノス主義を解説する必要がある．そのためには，ガレノスの伝記と，彼の医学，そして19世紀中葉まで大きな影響に与えたガレノス主義を理解しなければならない．この問題について，英語を使う多くの学者は，ガレノス著作の選集，医学史家のヴィヴィアン・ナットンの『古代の医学』（2005）の15章と16章や，哲学研究者のロバート・ハンキンソン編集の『ガレノス研究の必携書』（2008）などを用いてきた（Galen 1997; Nutton 2005; Hankinson 2008）．この状況が大きく改善したのが，2013年にスーザン・マターンが刊行したガレノスの伝記である（Mattern 2013）．マターンはアメリカの医学史家で，現在はイェール大学で教えているが，彼女のガレノス伝は，ガレノスの人生と医学の解説が一冊の書物となり，学術的に緻密であると同時に，他の領域の学者にも読みやすい著作となっている．ことに重要なことは，医学と社会と文化の歴史に関する研究の蓄積である．古代の医学史，社会史，文化史の進展を本格的に学び，古代ローマ帝国の，医療，疫病，政治，社会，文化，学問などのさまざまな領域の歴史からガレノス医学を明らかにしている．古代ローマ帝国の大都市の衛生や疫病の問題点や，奴隷や女性の問題も言及されている．また，ガレノス自身の「多弁性」も研究に利用されている．ガレノスの著作は膨大な量を持つが，そこに書かれている自分自身，周辺の医師，患者についての細かい記述や，医療の思想，方針，行動などについて論じていることが織り込まれている．この素晴らしい英語の書物を，もっとも理想的な翻訳者が日本語の書籍にしたこの訳書は，とても大きな意味を持つものである．

本書が伝えるガレノス医学の三つの重要なものを指摘しよう．もちろんガレノスは，彼の時代から見ると500年ほど前に活躍したヒポクラテスを深く尊敬して注釈本まで刊行していたし，その後に発展したギリシア語圏の医学の諸派を学んでいるので，これらの特徴はガレノス自身の独創性を示すわけではないが，ガレノスの体系の中で非常に重要なものとなった．その中の最初の主題が，解剖である．解剖はヒポクラテス文書にはほぼ登場しない概念で，アレクサンドリアのプトレマイオス朝の医師たちが人体の死体解剖を行い，ガレノスもアレクサンドリアで解剖を学んだ．そして，ペルガモンやローマに帰国した後，人体の死体解剖ができないため動物で代用し，ブタやヤギやサルの死体解剖や生体解剖を実際に行った．それはローマの貴族が後援した私的空間での解剖の説明や，ローマの公的な空間での見世物などの形を取った．この解剖重視が，のちの中世のイスラーム世界とヨーロッパ世界，そして初期近代の医学の世界に大きな影響を与えた．日本の医学にも，18世紀になると解剖が巨大な影響を与えて

いる．このユニークな特徴を設定したのがガレノスであり，そのありさまが本書では克明に描かれている．

第二の主題は，養生と治療と薬学の位置づけである．これはガレノス自身がもっとも膨大な大著を残した分野であると同時に，ヨーロッパの医療の実践としては19世紀中葉にいたるまで瀉血や下剤などの形で最後まで残った分野であった．ガレノスは，自然世界の四大元素と人体の四体液を対応させた．そして，世界や環境の様子，人体の健康と疾病の意味，健康を保つ養生の原理，治療における瀉血や下剤の効用や薬物の効用などを，諸原理の対応と関連させて論じた．東地中海の各地から，ガレノスは珍しい動植物や鉱物を収集して，アスファルト，インドのクコ，キプロスの黄鉄鉱などを薬物の中に入れていく一方で，個々の薬物の効用を経験だけで憶えるのは否定された．四大元素や四体液に関連付けられた原理的な説明が必要なのである．これとともに，養生・治療・薬物の世界が，意味合いを持つ世界になる方向性が作られた．この世界観は，キリスト教と緊張を含んで共存しながら大きな意味を持つことになる．

第三の主題は，養生などの原理性と深く関係することだが，医者と患者との関係である．ガレノスの理念的な患者は，ローマ帝国の貴族や皇帝のマルクス・アウレリウスなどを軸とする支配階級の人々であった．優れた上流階級の知的な人々が患者となった場合に，その人々の尊敬を得ることができる医療が，ガレノスの目標であり，他の医者と競合して富裕で知的な患者を獲得することが，ガレノス医学の特徴であった．ガレノスが当時の論理学・修辞学・自然哲学の効果を療法に組み入れることも，上流階級からの評価ということと他の医者との論争でわかる．それと並行して，この時期にローマ帝国で流行が始まった天然痘などによる〈人口〉の甚大な被害は，ガレノスの医療にとってはそれほど深刻な問題ではなかったことも憶えておくとよい．

本書の翻訳はガレノスとガレノス主義の意味について日本人が考えるための重要な書物である．ガレノスの著作も京都大学出版会から続々と翻訳が進んでおり，日本でガレノス主義の理解が定着する素晴らしいことである．おそらく次のステップは，ガレノスの多方向の意味をハンディにまとめた著作集の刊行であろう．ヒポクラテスは岩波文庫から優れた選集があり，ガレノス選集は英語でも重視されている．このような選集が手に入ると，ガレニズムを軸に19世紀中葉までの長い欧米の歴史を考える人々にとって，大きな益となるであろう．

Galen.（1997）. Selected Works. The World's Classics. Edited and translated by P. N. Singer. Oxford: Oxford University Press.

Hankinson, R. J.（2008）The Cambridge Companion to Galen. Cambridge Companions. Cambridge University Press.

Mattern, Susan P.（2013）The Prince of Medicine: Galen in the Roman Empire. New York, NY: Oxford University Press.

Nutton, Vivian.（2005）. Ancient Medicine. London: Routledge, 2005.

（鈴木　晃仁）

［白水社，〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-24，TEL. 03（3291）7811，2017年10月，四六判，384頁，4,800円＋税］

日仏薬学会，日本薬史学会 訳
『薬学の歴史　くすり・軟膏・毒物』

伝統医学においてもまた近代医学においても，医学と薬は深い関わりがある．伝統医学における薬はおもに植物性であり，それぞれの伝統医学によって用いる植物もまた処方も異なっている．我が国では古来，中国伝統医学に由来する漢方薬が用いられ，明治以後にヨーロッパからもたらされた西洋近代医学では，植物から抽出されたり新たに合成されたりした化学物質が広く用いられてい